

# 第2回鳥取県総合教育会議 議事録

## 1 日時

平成27年9月7日(月) 午後3時～午後4時30分

## 2 場所

鳥取県立図書館 2階大研修室

## 3 出席者

知事 平井伸治  
教育委員長 中島諒人  
教育委員長職務代行者 松本美恵子  
教育委員 坂本トヨ子  
教育委員 若原道昭  
教育委員 佐伯啓子  
教育長 山本仁志  
有識者委員 浅雄淳子  
有識者委員 石原太一  
有識者委員 笠原晶子  
有識者委員 椿 知夫  
有識者委員 福島史子  
有識者委員 山内 晃  
有識者委員 横井司朗

## 4 あいさつ

### (事務局)

- ・開会に当たりまして、平井知事より挨拶を申し上げます。

### (知事)

- ・先般、教育委員会と県執行部とで新しい教育に向けた大綱を策定し、それに基づき教育委員会の方で、私たちの思いを受けた教育を具体的に進めようとしているところである。今日も忌憚のないご意見をいただき、県の施策に具体的に結びつけていきたいと思っている。
- ・このたび学力調査が行われたが、国語は総じて県平均が全国平均を上回る傾向が出た。同じ子どもたちが以前に受けたテスト結果を比べると、前回より上がってきているというデータもある。地元の努力が現れている面もあるように思われる。
- ・しかし一方で、算数・数学のA、算数・数学のB及び理科において全国平均と一緒か下回るという状況にある。教育委員会はその差はわずかだと力説されているが、国語であれだけ頑張れるのなら数学や理科でも同じくらい良い結果がでるのではないかという地元住民の思いもあり、そういうことを考えると改善していかなければならない課題はここに隠れているようにも思う。
- ・学力は1年間やったらすぐに良くなるものではなく、毎年毎年の積み重ねの中で学力は生まれ、何年も努力していかないと変わらないということではないかと思う。
- ・この夏、我々を喜ばせたのはジャマイカのチームがここ鳥取市で合宿を張ったことであった。合宿中、ジャマイカのチームの皆さんに、鳥取県は人口が少ないという話をしたことがあったが、まったく意に介していなかった。ジャマイカは人口が270万人で世界の中で見ればものすごく少数であるが、陸上の世界では大変なエリート集団を生み出すことができたからだと思う。人間というのは、放っておいていいことはなくて、地域あるいは国を挙げてきちんと育てていく姿勢がなければ変わらないものもあると思う。鳥取県は人口が最少県ではあるが、チャンスは必ずあるということを信じたくなる。
- ・遠藤董(えんどうただす)先生や岸本辰雄(きしもとたつお)先生といった本県の教育の道を拓

いてきた方々の銅像が県立図書館周辺には建っている。また、若原先生のように大学の学長を務められた人材も鳥取から輩出している。こういうことから考えると、私どもは決して教育は不得手なことではなく、教育で国を建てる、県を建てることは十分可能なはずだと信じている。今回の学力調査の状況なども踏まえながら、建設的で事態を打開していくようなお知恵をいただければありがたいと思う。どうかよろしくお願ひしたい。

#### **(事務局)**

- ・続いて、中島教育委員長より挨拶をお願ひしたい。

#### **(中島教育委員長)**

- ・皆様お忙しい中ありがとうございます。今、知事からもお話があった学力・学習状況調査の結果において、一部平均点を下回るという結果については、私たちもいろいろ現状を見つめ、何をすべきかということを考えないといけないと思っている。後ほど教育長から現状について説明を差し上げるので、忌憚のないご意見を頂戴できればと思う。
- ・鳥取養護学校の医療的ケアの実施体制については、現状は3人まで看護師を確保でき、不足している人員は他の特別支援学校等からの派遣により補充している状況である。9月は6日間保護者から子供たちのサポートを受けなければいけない状況にあるが、少しずつ正常化に向かっている。引き続き鳥取養護学校の看護師の確保に努めるとともに、9月議会で常勤看護師の配置等について提案し、子どもたちの学習機会の充実を図っていきたいと思っている。
- ・また、鳥取養護学校の問題では、重度のケアを必要とする子どもたちへのサポートの仕方が弱いので、これから県教委としても対応を検討していくことになる。
- ・さらに、オリンピックのエンブレムに関してあるデザイナーが、「一人ひとりの個性をしっかりと伸ばしていかなければならない」「一人ひとりの個性を伸ばしていく先にオリジナルのデザインというものが生まれてきて、それぞれにデザインの世界が開いていくのだけれども、デザインの世界では一人ひとりの個性を育てることを、もしかしたらないがしろにしてきた部分もあるのではないか」という話をされていた。そのことはまさに、教育についても当てはまることであり、私たちはどうしても短期的な視野で成果を求めがちだが、鳥取という地域の中でしっかりと子どもたちのそれぞれの潜在力を伸ばしていくことをやっていかなければならないと思う。今日は活発な議論をよろしくお願ひしたい。

## **5 教育委員会報告**

#### **(事務局)**

- ・それでは、「平成27年度全国学力・学習状況調査結果」及び「特別支援教育における医療的ケア実施体制」について、山本教育長から説明いただきたい。

#### **(1) 平成27年度全国学力・学習状況調査結果について**

##### **(山本教育長)**

- ・本年4月21日に本調査が行われ、8月25日に公表されたが、鳥取県内で小学校6年生、中学校3年生、約5,000人前後がこの調査を実施した。国語と算数・数学それから理科という3科目についての調査であった。理科は3年ぶりに実施され、この結果、理科を含めて丁度3年前に小学校6年生で国語・算数・理科を受けた生徒がこの度中学3年生になり、同じ国語・数学・理科を受けているため、その間の成長ぶりなども分析できる形となっている。
- ・本県の状況は、国語は、Aが主に知識に関する問題、Bが主に活用に関する問題だが、AもBも全国平均を上回っている。これは従来からの傾向であるが、本県は読書の取組を盛んに行っており、朝の読書などの取組は全国トップクラスである。こうしたことを背景にしつつ、国語は全国平均を上回っているという状況である。ただ、算数・数学は、Aが小学校も中学校も全国平均を下回っている。Bは小学校では若干上回っているが、中学校では下回っている。理科は小学校では下回っており、中学校では全国平均と同じである。これも従来からの傾向であるが、算数・数学・理科、いわゆる理数系に課題が残っている。
- ・現在の中学校3年生が小学校6年生のときに受けたときの状況と比べると、全国平均との差で見ると良くなっている。従来、算数・数学と理科は悪かったが、この差が縮まってきているという

点では若干の改善は見られるという状況にある。ただやはり、県としてはこの算数・数学、理科に課題があると捉えており、これらの改善に今後力を注いでいく必要があると思っている。一方、国語の取組も弱めることなく続けていく必要があると思っている。

- 様々な取組を進めてきているが、授業のやり方の中で言葉を使った活動、いわゆる発表や話し合いについては定着してきているし、人間関係でも従前よりは良い方向に進んできているため、引き続き学級づくり・人間関係づくりの取組に力を入れていきたいと考えている。
- 課題となる部分については、例えば算数では、単純な計算は割とできているが、記述式の問題になると途端にできが良くないということが見受けられる。質問紙調査では、「将来の夢や目標を持っていますか」の質問で、「持っている」と肯定的な回答をする子どもが全国平均に比べ若干少ないということ。あるいは、「発表が得意だ」と自信を持って答えるようなところも全国平均を下回っており、今進めているアクティブラーニングの強化や、自己肯定感を達成できるような取組が必要ではないかと考えている。
- 資料1の2ページ以降は、若干問題の分析等々も含めて書いている。小学校6年生の結果を平成24年度から並べているが、大体似たような傾向、全国より若干良いという傾向であった。漢字を書いたり、正しく読み取ったりということはできるが、新聞のコラムを読んで、筆者の意図を考え、想定しながら表現を捉えていくような問題については、若干課題がある。3ページでは、学校新聞を作り、取材した内容を整理しながら書いていく国語の問題で、まとめる力に弱さがあるというような分析をしている。また、算数の計算は割とできるが、なぜそうなるのかの理由の記述が全国よりも劣っていて、学んで自分の考えをきちんと表現することに若干弱さがあると思われる、授業の中でしっかりと力をつけていくということが必要であると思っている。また4ページでは理科を挙げているが、目に見えない部分の捉えがなかなか難しい。例えば、砂糖を水に溶かして、温度によって溶ける量が異なるという問題は、50℃では全部溶けたが、それを5℃に冷やした時に何グラム溶けずに出てくるかという単純な引き算の問題だが、実際にグラフを読み取ることができない。また、計算ができていても、その理由がきちんと書けないという課題もある。理科については、小学校の質問紙調査で見ると、「理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えている」という回答で全国平均よりも下回っており、観察・実験絡みの部分で少し弱さがあるという捉え方をしている。なお、中学校3年については大体似たような傾向である。
- 6ページと7ページは質問紙調査の概要であるが、「将来の夢や目標」で肯定的な回答が少なかったり、「学校の授業以外での勉強時間が2時間以上」という回答が全国平均より少なかったということが見受けられる。逆に良い傾向としては、「本を読んだり借りたりするために、学校図書館、地域の図書館へどれくらい行きますか」という回答には、全国に比べても10ポイント以上良く、「地域の行事に参加している」については、全国に比べてかなりのポイントを上回っている状況である。これは県の平均だけで見ているが、実際にはもっと個々に入っていくと分析をする必要があると思っており、これから市町村と提携しつつ、学校ごとの傾向の分析をしながら、課題を見つけ、そこに力を入れて取り組んでいくことが必要であると思っている。
- いずれにせよ一過性の調査だけに終わらせず、調査結果を学校としっかりと共通理解を図りながら、必要な取組を進めていきたいと思っている。また、別紙で対応について記載しているが、各学校が、「調査から改善までの取組」を継続的な改善サイクルとして確立し、全体の学力アップに繋げていきたいと考えている。なお、当然市町村を通じて各学校とこの思いを共有する必要があり、具体的な取組も積極的に紹介していきたいと考えている。
- 今後の方策については、放課後等も活用しながら、また算数・数学では応用問題を解くためのドリルも活用しながら、学力定着を図っていきたいと考えている。さらに、市町村と連携して、課題のある学校等については、指導主事や外部講師等も活用しながら授業改善の取組も行っていきたいと思っている。加えて、ホームページに学力向上のデータをワンストップで見られるようにして、教員や保護者もアクセスしやすいような環境整備を図っていききたいと思っているし、小学校と中学校の連携を強めて、例えば小学校の算数を中学校の数学の先生が教えるとか、小学校の理科を中学校の理科の先生が教えるなどの仕組みも市町村と連携しながら取り組んでいきたいと考えている。

## (2) 特別支援教育における医療的ケア実施体制について

### (山本教育長)

- ・次に資料2の「鳥取養護学校の医療的ケアの実施体制」について、現在3名の非常勤の学校看護師の確保に加えて、中央病院等々からの派遣により1日あたり5、6名の体制が取れており、比較的スムーズな形で医療的ケアあるいは授業が進んでいる状況である。またこうしたことに加え、課題となっていた医療的ケアの決定方法、保護者の要望窓口の明確化、看護師の意思決定過程の参画についても、当面取り得る体制整備を進めているところである。
- ・さらに、9月県議会では、常勤看護師の配置及び学校長が専門家からの助言を受けることができる体制整備に伴う経費の予算措置をお願いする予定であり、しっかりと医療的ケアの実施体制整備に取り組んでいきたいと考えている。

## 6 意見交換

### (事務局)

- ・今回の意見交換では、有識者委員の皆様から教育環境の充実に向けた新たな取組へのアイデア等について提案いただき、議論を深めていきたいと考えている。それでは横井委員から発言をお願いしたい。

### (横井委員)

- ・鳥取県のような小さい県であれば学校が個々で頑張るだけでなく、公私の枠や校種を超えてチームとして何かできないのかと考えている。また、地域が抱える課題について、いくつかの学校で連合体をつくるなどして、共通する教育課題を解決できる仕組みがあればよいと思う。
- ・全国学力・学習状況調査結果について、鳥取県の場合はある程度国語力があるが、理数系が弱いことは事実と言える。大学受験レベルにおいても、センター試験の全国平均を超えたことがないのではないかと。理数系は全国平均でも総合点でも低いので、高等学校の学習の方にも影響がでているように思う。
- ・鳥取県版SSH（スーパーサイエンスハイスクール）をつくるなど、理数系対策も視野に鳥取県ならではの取組強化が必要ではないかと。また、様々な学校が特色ある学校づくりを進めているが、例えば、鳥取城北高校の相撲など、スーパーアスリートを育てるSAH（スーパーアスリートハイスクール）もあってもいいと思う。
- ・鳥取県には優秀な教員がたくさんおり、県はモデルとなるような優れた教育実践を行っている教員をエキスパート教員として認定している。しかし、鳥取西高校のエキスパート教員は鳥取西高校にしかいないので、他校の生徒は鳥取西高校のエキスパート教員の授業を受けることができない。生徒の学力向上やモチベーションを高めるため、校種を超えて多くの生徒が希望するエキスパート教員の授業を受けることができるようにはできないだろうか。例えば土曜日授業をもっと公開した形態で実施したり、単位制やポイント制の導入を図ることも検討してみてもどうか。

### (石原委員)

- ・全国学力・学習状況調査結果について、全国的な問題だと思うが、漢字は結構書けているが、文のつくり、主語・述語は何かと聞いても答えられない子どもが多い。ルール部分のインプットができていないという弱みがあると思う。
- ・質問紙調査についてはさらに踏み込んだ県独自の調査を実施してはどうか。例えば、「将来の夢や目標を持っていますか」という質問があるが、さらに踏み込んで「その夢や目標は達成できそうか」などと聞いてみる。
- ・2020年度からの大学入試改革に向けて英語4技能（聞く、話す、読む、書く）を使える人材を育成する必要があるが、生徒の能力差がある中、一つの学校で横並びでできるのかという課題がある。そこで、学校の枠や学年の枠を超えて、技能レベルの一緒な子どもたちを集めた能力別クラスによる英語授業を実施してはどうか。
- ・今、NPO法人石原教育振興会では、本年8月から三朝町で、ひとり親家庭に対する学習支援事業を行っている。eラーニング型アニメーション教材「すらら」というツールを使い、ネットにつながっているパソコンがあればどこでもできる。子どもたちの学習状況はパソコンで監督して

いるので、同じような問題を間違っていたり、問題に行き詰まっている状況を把握することができ、必要なフォローも行っている。これなら、中山間地で塾に通いづらいという子どもたちも、ネット環境さえ整備すれば親の送迎負担なく取り組むことができる。また、経費については、通常の子どもたちは月1万2千円であるのに対し、ひとり親家庭の子どもたちは月5千円としており、低料金で学習できる。現在、通常の生徒も含めて4人生徒がいるが毎月の収支は何とかプラスでやっており、この取組を全県的に広げてみてはどうか。

#### (山内委員)

- ・全国学力・学習状況調査結果について、9月4日の朝日新聞にアクティブラーニングをよく行った小中学校ほど平均正答率が高い傾向が出ているという記事が出ていた。これを見て、特に思考力を問う応用編のB分野において、アクティブラーニングは有効な手段だと思った。また、今の中学1年生から新しい大学入試となるので、アクティブラーニングにより自分で答えを導き出す子どもたちを育てることは非常に大事なことだと思う。アクティブラーニングは私立でも取組を進めていくが、県立学校においても何らかの形で公私連携して積極的に導入する方法を考えていただきたい。
- ・次に、私からの提案についてである。今、高等学校の教員に要求されるものが非常に過度でないかと思っている。あくまで教員なので授業は第一番である。ところが教員は授業をして、さらに生徒指導や学級経営をして、そしてそれにプラスして部活動もできて当たり前となっている。正直、この3つを要求されてできる教員は限られており、非常に優秀な教員もいると思うが、そういう人たちは往々にして学校現場にいない場合が多い。部活動は今の固定観念でいくと教育の一環であるため、当然教員が顧問としてやっていくべきだという考えになるが、これを続けると仕事が増えてしまう。従って、考え方を変えて、例えば欧米のように授業は授業、部活は部活で人を変え、スポーツ活動や文化活動は専門の人を外から呼んで来るというスタイルが良いと思っている。8月28日の朝日新聞には、大阪市の市立中学校130校のうち既に外部委託を8校8部活で始めたが出ていた。基本的に顧問はつけなければいけないが、ある程度コーチに任すこともできるようである。現場では、外部専門家から指導を受けて子どもたちのスキル向上につながっているとか、現場の教員からは専門ではないため十分な指導ができないというジレンマから解放されたという声も上がっているようである。私自身の考えだが、この取組を全国的に進めていけば子どもたちの競技力向上とともに教員の多忙感解消、また新たな雇用にもつながると思う。東京都杉並区も始めたようだが、鳥取県でもできないだろうか。
- ・最後に、県は県立高校の推薦入試で全国募集をすることになったが、子どもたちを外から呼んだ限りは責任を持ってしっかり育てる必要があると思う。中学生や高校生は大学生と違って、生活指導をきちっとしなければならぬ。従って、学生に対して住まいを提供するだけではなく、住まいに舎監や寮の管理者を配置する必要があると思っている。県が学生寮や宿泊所の整備を行うのであれば、私学も積極的に取り組んでいきたいと思っている。鳥取県の東中西部で共通に使える学生寮等の設置を検討していただきたいと思う。

#### (椿委員)

- ・横井委員が提案された「校種を超えたエキスパート教員の授業を受ける仕組みづくり」については賛成である。子どもたちに本物を見せることは大事なことである。
- ・また、養護の問題だが、現場職員と学校と保護者とのコミュニケーションがとれていない現状にあると思う。特に特別支援学校においては、保護者との連携はとても重要であり、教職員と校長、そして保護者が十分に連携していくことを考えてもらいたい。
- ・さらに、山内委員が提案された「外部指導者による部活動指導」については、競技力向上や新しい雇用の面でも大きな効果があるので、ぜひ検討していただきたいと思う。なお、外部指導者は誰でもよいということではなく、有資格者であるとか必要な資質を有するなど、一定のルールを設けるべきである。

#### (竺原委員)

- ・社会教育課が行っている「ケータイ・インターネット教育推進啓発事業」について、現在、学校行事としての児童生徒を含む講師派遣は事業の対象外である。小学校5、6年生と中学生には、親が研修会で学んだことを伝えるのは難しく、「親子で一緒に聞き、家庭で課題について話し合い

たい」との保護者の希望がある。事業例としては、親子研修45～50分、子ども退室後、子どもには見せられない部分についての大人研修を30分。是非、事業にさせていただきたい。

- ・また、ゲーム依存、ネット依存にならないために、Wi-Fiなど通信環境の整っていない施設で1週間程度の宿泊研修を行い、自然体験学習、メディア・リテラシー学習を行うネット断食プログラムの開発と実践についても提案したいと思う。
- ・加えて、アクティブラーニングなどの様々な先進的なプログラムができていながら、意欲がある子は自主的に勉強をやっていけるが、そうでない子どもたちにはいかに意欲を持たせるかというプログラムも大事である。他人への人権学習より、自分を大切と感じるための自分の人権を基盤にした人権教育プログラムを推進していくことが必要である。
- ・最後に、幼稚園や保育園の教員・保育士が非正規雇用になっているという現状を心配している。非常勤職員や臨時職員、講師が増えていると思うが、正規教員と同等の業務と責任を負いながら、不安定な雇用状態の中で将来への不安を抱えて教壇に立っている。こんな状況下では、いくら熱心に取り組んでも、継続的な教育の実践は難しい。果たして子どもたちに行き届いた教育を保障できているのか、不安が残る。

#### (浅雄委員)

- ・子どもたちの家庭での学習時間が非常に少ないということがある。小学生に「勉強がわからないときに誰に聞きますか」と聞くと、全国平均では「保護者」が割と高いのですが、鳥取県ではそれが低いので、共働き家庭が多いということが影響しているように思う。親のいないところでの学習というのはなかなか難しいところがあるので、その部分を家庭に任せるのではなく、少しシステム化して、土曜日授業や放課後であるとか、学童保育も含めて少し力を入れていかなければ定着が難しいと思う。
- ・また、大学1年生が高校の学習をしてから大学の授業をスタートする。高校1年生が中学の勉強をおさらいしてから高校の勉強が始まる。中学1年生では小学校の勉強をしてからと、全国的にすごく積み残しがあると聞いている。秋田県や福井県など、全国学力・学習状況調査結果が高い自治体は、解答率が0%～40%ぐらいのところはぐっと低い。勉強が難しくなる小3や小4段階では、基本的な理解をしっかりと入れてクリアさせていくことが重要であり、組織的に強力にやっていく必要がある。小学校中学年の学習の積み残しによる高学年時の遅れや中学校1年のギャップ解消のため、算数、国語の授業時間の工夫や教員の重点加配を検討してはどうかと考える。
- ・先般の教育懇談会で、将来の起業につながるキャリア教育の観点からも、プログラミング言語の獲得を含めたICT教育が必須となるので、ぜひ推進してほしいという意見が保護者からあった。今すぐに学校教育に盛り込んでいくことは教員の負担が大きいと思われるので、まずは土曜日授業等を活用してモデル的に実施してみてもどうか。
- ・本県の教育に関する大綱に“遊びきる子どもの育成“という言葉があるが、幼稚園や保育所の活動の中では自然を生かした遊びが十分でない。手先の不器用な子供も増えており、発達障がいの子どもの早期対応も必要となるなど、「感覚と体の統合」という観点から、幼稚園、保育所の段階でしっかりと科学的根拠をもって、「遊び」というものを考えていかなければならないと思う。

#### (福島委員)

- ・全国学力・学習状況調査結果の中で一番気になったのは、「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対して、子どもたちが答えられなかったということと、「学校の授業時間以外に家で勉強しますか」という質問に対して回答が低く出ていることである。スクールソーシャルワーカーは、子どもたちの生活も含めて子どもたちの安心安全の確保ができているか、落ち着いて学習に臨める環境にあるかということ、学校の先生方と一緒に考えていく職種であるので、子どもの貧困問題から目を背けるわけにはいかないと思っている。昨年8月に発表された子どもの貧困率は16.7%で、実に6人に1人の子どもが貧困状態にある。親は必死に働いているので家を留守にすることが多く、子どもが家庭で勉強する十分な環境を整えることが難しい状況にある。このことについて、学校がどういうふうに気付き、支援していったらよいか、先生方と相談しながら連携して対応に当たっている。
- ・スクールソーシャルワーカーの増員が必要と感じるが、同時に貧困をはじめとする子どもの状況に目を向けることができる教職員を増やすことも重要である。子どもの貧困を前に、「何をしてあ

げたらいいのか」と嘆く先生方もおり、力を奪われていくのは子どもたちばかりではなく、現場の先生方もそうである。貧困をはじめとする問題を抱える子どもの背景に目を向けることのできる教職員が増えるよう、教職員研修の内容に工夫を加えてほしいと思う。

#### (事務局)

- ・有識者委員から一通り意見をいただいた。これを受けて教育委員の皆様からご意見をいただきました。

#### (山本教育長)

- ・有識者委員の皆様から数々の提案をいただき、感謝を申し上げる。各委員からの発言のうち主なものについて回答をさせていただく。まず、横井委員の理数系対策については、とりっこだリルを作っているので、応用編を活用しながら、しっかりと取り組んでいきたいと思っている。また、いろんな面で公私の連携にも力を入れていきたい。さらに、地域の課題を解決するための学校のコミュニティの創設については、現在、中学校区で中学校と傘下の小学校が連携して一つの子供像を共有しながらコミュニティを作っていく取組をモデル的に行っているところであり、これを広げていく形で進めていきたいと思う。校種を超えたエキスパート教員の授業を受ける仕組みづくりについては、現在、英語は他校に行って授業を行っているので、他の教科についてもできないか検討してみたいと思う。
- ・石原委員からの子どもの自己肯定感を測るような独自のアンケート実施については、学力・学習状況調査で足りない部分があれば少し検討してみたいと思う。また、学校・学年の枠を超えた能力別クラスでの英語授業の実施については、現在、各学校の中でクラス編成を学年の中で行っているが、学校を超えてということになると、移動の問題などクリアしなければならない課題があるので、ICTを活用した能力別学級編成について少し検討してみたいと思う。ひとり親家庭の学習支援事業については、知事部局とも絡んでくるが、まずはeラーニング型アニメーション教材「すらら」について研究してみたいと思う。
- ・山内委員からのアクティブラーニングの積極的な導入については、アクティブラーニングは確かに効果が上がっているという話を聞いており、この研修を行う際には私学も参加していただける機会を設けたい。また、教員の多忙感解消等のための部活動への外部指導者の導入については、本県でも外部指導者をどんどん入れるようにはしている。しかし、生徒の引率ができないなどの問題があるので、それらの課題解決を図れる新しいシステムができないかということ、いま内部的に検討しているところであるので、また相談させていただきたい。県外からの生徒募集に伴う学生寮等の設置については、県立高校でも県外から生徒を募集するようにしたが、中山間地の学校で募集人数も少ない状況なので、できれば地元の方々の協力を得ながら下宿を進めていきたいと考えているが、今後県外からの生徒募集を増やすことになり、学生寮の必要性が高まれば、検討してみたいと思う。これは知事部局との絡みが大きいので、相談しながら検討できればと思っている。
- ・椿委員からの子どもたちに本物を見せることの重要性については、同感である。アスリート派遣事業を実施しているので、芸術なども含めて子どもたちに本物を見せて意欲をかき立てるような取組を進めていきたいと思う。また、養護学校における保護者との意思疎通については、保護者と良いコミュニケーションを取れるような仕組みを考えたい。部活動への外部指導者の導入については、資格や資質向上に向けた取組について検討してみたいと思う。
- ・竺原委員からはメディアについての話があり、親子一緒に研究会を「ケータイ・インターネット教育推進啓発事業」の対象にしてほしいということについては、以前は対象としていたが、要望がすごく増えて処理できなくなって対象外にしたという経緯があるので、その辺りを含めた検討が必要だと思う。また、ネット断食については、以前地域を挙げて「ノーテレビデー」を設けようという取組をやったことがあり、テレビがネットに変わっていつている部分もあるので、市町村とも相談してみたいと思う。さらに、教職員に非正規職員が増えていることは間違いないところもあるが、定数管理上の問題などもあるので、まずは非正規職員にしっかりと研修をしていかなければいけないと思っている。
- ・浅雄委員から、小3、小4で勉強の積み残しがないようにしっかりと教育をする必要があるということだったが、不登校の問題も小3、小4で出てくる。現在、県ではしっかりと教員を配置し

た方が良いとか、少人数のクラス編成で勉強をした方が良いかななどの議論をしているので、その中で工夫ができればと思う。また、プログラミング言語の獲得を含めたICT教育の推進については、今年から情報産業協会と連携して東部地域で授業を始めているので、こういった取組を拡げていくことができないかと思っている。

- ・最後、福島委員からの意見については、子どもの貧困の絡みで教職員への研修の充実やスクールソーシャルワーカーの増員などの話があった。大切なことだと思うので、しっかりと取り組んでいきたいと思う。

#### **(若原教育委員)**

- ・多様な意見をいただいたが、その中で、県教育委員会として実現できるかどうかということは、ひとつひとつ検討して精査していく必要があると思う。
- ・全国学力・学習状況調査結果を保護者の方が一番気にされるのは、自分の子どもが鳥取県で教育を受けて、将来的に不利益を受けることにならないかということだと思う。不安や心配を払拭できるような、教育委員会としてのメッセージを出せないのかと個人的には感じている。
- ・全国学力・学習状況調査の成績が非常に良い県の大学進学率はどうかというと、必ずしも一致していない。さらに、その先の将来どんな人生を歩むのかという追跡調査は、多分誰もしたことがないので、本当に気にしなければならないことは何なのかなということ冷静に考えてみる必要があると思った。

#### **(松本教育委員長職務代行者)**

- ・有識者委員からの提案は既に教育委員会で把握していて、一つずつ取り組んでいるところであるというのが感想だが、その取組の中で、ちょっとした隙間や見落とししていたもの、この取組は大事だということを今回の提案で改めて気づかされた。
- ・全国学力・学習状況調査結果を踏まえると、浅雄委員の言われた勉強の積み残しの解消が必要だと感じた。点数を上げるためには、底上げを図ることが一番手っ取り早いと思う。そういう面では積み残しにあっていない子どもたちは、貧困家庭で普段から家庭内で勉強を見てもらえていない子どもや障がいのある子どもが多いのではないかと思うので、これらの子どもたちに対する取組やケアに力を入れていくべきだと思う。

#### **(坂本教育委員)**

- ・ひとり親家庭や共働き家庭には、ボランティアで学習支援をしている学校がたくさんある。また今回の全国学力・学習状況調査の「学習塾に通っていますか」という質問の回答が、小学校も中学校も全国平均に比べてマイナス数値であることは、手前味噌かもしれないが、鳥取県の義務教育は素晴らしいと勇気づけられた。30人学級などについては、他県から羨ましがられているので、今後さらにどこを詰めるかは保護者次第であり、家庭の意識次第だと感じた。

#### **(佐伯教育委員)**

- ・全国学力・学習状況調査結果を踏まえ、課題と成果がはっきり出た。授業改善が進み、子どもたちの発表する機会が増え、考えることができるようになったところが質問紙でも出ている。これは成果として上がってきているが、質問紙は県民性というのか、ちょっと控えめに答える傾向があるので、例えば「国語、算数や数学が好き、よくわかる」というところが少し低めに出ているように感じている。その意味では、学習意欲を高めるとか、子どもが自信を持てるような、学ぶ良さを実感できるような学習の工夫をこれからもっと進めていかなければいけない。
- ・また、300字や400字と指定のある中で自分の考えをまとめて書くところの苦手意識があるようなので、経験を積ませていきながら、短い限られた文字数の中で自分の考えをきちんと述べられるようにしていくという経験を積ませるような学習に踏み込んでいかなければいけないと感じた。今回の調査結果を踏まえ、これまで取り組んできている学習の改革をさらに進めていくことができればより確かな力となっていくのではないかと感じた。横井委員がおっしゃったように、理数系はずっと弱いと実感しているので、もう少しこ入れしないといけないと改めて感じた。

#### **(中島教育委員長)**

- ・有識者委員の皆様から多様な意見をいただいた。抽象的に捉えると、一つは学校の中をどう充実させるか、学校がどう外と繋がっていくかということになる。全国学力・学習状況調査については、ドリル的な学習が必要だということももっともだと思う一方で、点数を上げるためにドリル



をやりましょうというのもさえない話である。そうした時に、アクティブラーニングのような話もあって、何をどう話すかという前に、話すことがあるのか、何を話すのかということが問題で、要するに私たちは、より自由に考えるために、いろいろなことを覚えるのだと、基礎的なことを覚えることによって、より自由に考えることができ、より深く考えることができ、それによって人とコミュニケーションができ、受動的ばかりでなくアクティブに学んでいくことができるし、プレゼンテーションができてくるということだと思うので、改めて子どもたちに身につけてもらわなければいけない能力について、地域の方も含めて学校文化、地域文化などいろいろなものを乗り越えていかないと、今の子どもたちの学習の課題は解決できていかないとところがあるのだと思う。

- 学校だけでなく学校と外の連携を深めながら、コミュニケーションの機会を増やして理想を共有していくということをもう一段深くやっつけていかなければいけないのではないかと感じた。そういうことを通じて、また来年も学力・学習状況調査があるが、単純に学力・学習状況調査の結果だけではなくて、鳥取県内の学力の質が熟してきたというふうになるようなことを、少しずつだが皆さんの意見も参考にしながら進めていかなければならないと改めて感じた。提案の内容については、今後検討してできることは積極的に取り組ませていただきたいと思う。

## 7 最後に

### (知事)

- 皆様から貴重なご意見をいただいた。正直な感想を申し上げれば、各委員の皆様がおっしゃったこととまったく同感である。自分自身も驚きを感じた。課題は見えてきたと思う。教育委員会も逃げないでほしいと思うし、執行部側も逃げるつもりはない。市町村も協力してもらえるところは協力してもらわなければいけない。今日の意見を参考に、教育委員会と執行部とでこれから当初予算に向けてどのような戦略を立てるのか考えたいと思う。
- 昔から理数系が鳥取県の弱点であって、これが変わっていないということである。このまま放置していいかということ、私はそうは思わない。理数系をどうやってブラッシュアップしていくのか、例えば実験の面白さとか、数学の先生を嫌にならないような面白い教え方だとか、そういうことを一つずつ考えていかなければならないと思う。まずは、今回の結果を分析してみるのが一番だと思う。
- 浅雄委員がおっしゃった学習の積み残しについては、私も以前から感じていた。例えば、かけ算の繰り上がりや分数の計算など、基礎的なところ並びに基本的な学ぶ技術や自分で考える技術が弱いのであればそこから直していかないと、いくら理数系の積み木を積み上げていっても、高校から大学に届くような学力にはなっていないと思う。従って、重点を置くべき学年や学習分野があるのであれば、今回の学力調査結果を踏まえて、市町村とも連携して必要な取組を行う必要があると思う。
- 鳥取県民は自分で考える力が育っていないのではないかという話も聞くが、それは学校教育の時代からあるのかもしれない。従って、人前で発表する時間をつくるとか、自由研究などの自ら考えるアクティブラーニングをしっかりとやろうという山内委員の話もあったが、これも切り込んでいく必要があると思う。
- 松本教育委員がおっしゃったように、実は学力調査を分析していくとわかることがある。もっと教育委員会もこの情報を有識者委員に明らかにされた方がよいと思う。現実から目をそらすのではなくて、差がついてしまっている市町村をキャッチアップする手法を考えることが必要ではないかと思う。同じ意味では、貧困の連鎖もキャッチアップが必要なところだと思う。貧困の連鎖が学力の貧困の連鎖にまでつながらないように、すべての子どもたちにチャンスが与えられるようなことも併せて考えなくてはならないと思う。
- スポーツのことで言えば、もっと部活を合理的にできないかという話があった。今年、境港総合技術高等学校弓道部の女子が全国高等学校総合体育大会で優勝した。20回して20回とも的に当たるといって最高の成績だったが、これは単なるまぐれではない。その裏には王子製紙に勤めている指導者の熱心な指導により競技力が向上していったということがある。このように、学校の中だけで解決できないのであれば、素直に地域で解決することを考えたらいいと思う。先般、ジ

ジャマイカのチームが来たが、4×100mで優勝したチームの助監督が「鳥取の子どもを受けてもいい」と言ってくれた。面白いと思う。ここだけで全部を解決できないのであれば、人材交流や留学的なことも含めて考えていいのではないかと思う。それが子どもたちのためではないかと思う。

- ・今日もたくさん意見が出た。教育委員会の理解を得ながら、今後來年度以降の事業化に向けて検討を進めたい。

**(事務局)**

- ・以上をもって、第2回鳥取県総合教育会議を終了する。